

平成16年10月16日 淀川水系流域委員会様

山岡久和

意見書

淀川水系河川整備計画基礎原案および基礎案と意見書との対比シートより、65ページ①宇治川「琵琶湖後期放流に対応するための、天ヶ瀬ダム再開発計画の調査検討を行う。その結果及び河川整備の進捗状況を踏まえ、「塔の島」地区の河道掘削時期を検討する。」とあり、意見書における記述では、「塔の島地区の河道掘削」は、この地区の歴史的景観を保全するため、できるだけ少なくするべきであり、できれば避けるのが望ましい。堤防補強などにより、河道を掘削せずに流下能力を増大する可能性についての検討が望まれる。流下能力の検討では、既往洪水時の流下状況を参考にする必要がある。とありますが、私もそうおもいますが、避けるためのあらゆる可能性を考えてもらえないものか、お願いします。

22ページ4. 2. 1河川形状では、「川が川をつくる」のを手伝うという考え方を念頭に、以下の文書は私も同感であります。最近の流域委員会の審議では、治水が優先して、コストが続いて、まるで旧河川法の域での会議のように感じます。環境の保全があまりにも軽視されているようにみえます。もう少し社会科学や、自然科学の視点の委員の意見が反映されなければいけないのではないですか。66ページ②瀬田川「琵琶湖からの放流量を増大させるため、景勝地区である瀬田川下流（鹿跳溪谷地区）の流下能力の増大方法を環境、景観の両観点から検討する。」とあり、意見書における記述では、「鹿跳溪谷の流下能力の増大」については環境と景観の両観点から検討するとされているが、歴史性も考慮すると開削は許されない。したがって、流下能力を増大させる方法としてバイパス・トンネル案が有力視されるが、環境影響評価をおこなうとともに、洪水時以外の鹿跳溪谷の流況が保全されるようにする必要がある。」とありますが、それならば、「塔の島」地区についても流下能力を増大させる方法としてJR鉄橋下流域まで、バイパス・トンネル案（地下河川）を提案します。なぜならば、琵琶湖の浸水被害の軽減をはかる前に、湖岸堤の新設、内水排除ポンプの増強・新設を第2回ダム・ワーキング（平成16年7月18日）資料4-2の45ページに少なくとも約1,700億円かかる。とありますが、どうしてやりきれないのですか。どこに問題があったのですか。それに、同ダム・ワーキング資料4-2の15ページ琵琶湖総合開発事業のプロジェクトの中では、どのように位置づけられているのですか。琵琶湖総合開発事業の評価はどうなっていますか。このことを評価しないで、既定の事実として、1500t放流ありきでは、あまりにも乱暴ではありませんか。天ヶ瀬ダムは、このままでも1,500t放流が出来る能力があるのに、さらに琵琶湖の浸水対策と、後期放流を速やかに出来る能力を主な目的として、再開発が計画されています。このことが許されるのでありましたら、現在、天ヶ瀬ダム再開発計画で検討されているバイパ

ス・トンネル案をさらに延長して川の下に地下河川（バイパス・トンネル）を築造して、「塔の島」地区の環境と景観を保全して、歴史性を考慮されては如何なものかと思います。これにかかるのは、相当の技術力と地下水問題と事業費が高くつくだけであると思われます。事業費は相当高くつきますが、琵琶湖の浸水被害の軽減のための後期放流であるならば、追加分は300億円程度で済みます。平成9年の河川法の改正は、「河川環境の整備と保全」であります。「塔の島」地区は、千年の自然・歴史文化が育くまれた景観であり、兩岸には世界遺産があり、年間400万人もの観光客が世界中からも訪れて今日まで守られてきたものであり、後生に残さなければならない場所だと私は思います。いままでに、治水という名目で、十分に環境破壊をしてきたではありませんか。ましてや当初計画では3mの河床の掘削が、1.1mに変わるような、今回また、0.8mでも可能であるというではありませんか。そのうえ、この場合の内水排除については何も考えていないではありませんか。観光面から言えば、観光スポットを分断して、たびたび起こる琵琶湖の後期放流による塔の島への立ち入り禁止と、通行止めによる右岸と左岸の交流ができないことになり、大きな打撃をうけることになりますし、後期放流時（1,500t）に、一度雨が降れば少量であっても浸水の恐れが常に発生することになります。ただ、治水（水理学上）の、流れるか、流れないかの議論であって河川法の改正の趣旨からも遅れているのではありませんか。言い換えれば、環境とか、宇治市民の生命・財産については、どのように考えておられるのか、滋賀県民とは違うのですか。このようないい加減とも思えるような計画のために、これ以上、「宇治川改修」という名目で、川の自然・環境・景観を破壊してはいけなとおもいます。もし、このまま進められるなら、流域委員会として、今からでも「鹿跳溪谷」地区と同じように対応されることを望みます。